

平成 28 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

カガナ カ ハ マ ヒ
氏 名 笠 原 正 秀

研究期間 平成 28 年度

研究課題名 海外職業体験型研修プログラム (GCEP) の成果とその分析—英語力と異文化適
応能力の観点から—

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	笠 原 正 秀	国際コミュニケーション学部	教 授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

国際コミュニケーション学部では、これまで「海外英語演習 A」として、オーストラリア・ニュージーランドといった南半球にある英語圏の国々の大学併設の語学学校の提供する英語専修プログラムに、夏休みの約 2 か月間、学生を派遣していた。しかし、2016 年度からはその内容を一新し、言語習得を目的とする語学留学から、これまで学生が学んできた英語を、海外で実際に仕事に従事する中で英語を使っていく、職業体験型研修プログラムに内容の刷新を行った。これまでの語学留学と実際に社会人として仕事の現場で英語をコミュニケーションの道具として使っていくのでは、どれくらい実践の英語力にちがいが生まれ、また異文化適応能力のどのような側面が強化・育成されるのかを検証することを目的とした研究である。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

英語力の把握にあたっては、プログラム参加時に英語力の証明として提出を求められる TOEIC のスコアを基本とするが、前期に行われる座学の中で TOEIC の再受験の必要性が認められた学生の場合は、そのスコアを現地研修参加前の英語力とした。また、現地実習後の英語力は、夏休み明け (10 月初旬) に TOEIC を受験する機会を設けている。ここでみられるスコアの変化を英語力の変化 (伸び) としている。また、帰国後の TOEIC 受験時に「留学満足度調査 (アンケート)」を行っており、自己評価としての英語力を回答する項目があるため、そうした質問への回答結果も自己評価 (自分の英語に対する自信) ということで検討資料としている。異文化適応能力に関しては「国際適応力テスト (以下、ICAPS と記す)」(マツモト, 1999) を利用した。ICAPS への回答も帰国後の TOEIC 受験の際、同時に行っている。

3. 研究成果の概要 (600 字～800 字程度で記述)

2016 年度は本プログラム開講初年度であり、また 2016 年度からプログラムが開講されることが決定されてから実施に至るまでの時間がなかったため、十分な広報活動ができず、また本プログラムに参加するためには英語力もある程度以上のものが求められ、プログラムにかかる費用の捻出という 2 つのハードルがあり、2016 年度は参加者数も限られていた。本報告書では、2016 年度ハワイ研修プログラムに参加した 3 名の学生の回答結果をもとに要点のみ、報告するものである。TOEIC にみられる英語力の変化としては、大きく伸ばしたケースとしては現地研修参加前の段階から 150 点以上もスコアを伸ばした例もみられたが、多くは 50 点未満の変動であった。特筆すべきところでは、帰国後の TOEIC で 800 点に達するようなケースもあった。次に、自己評価 (10 点満点評価) としての英語力 (四技能部分のみ抜粋) については、Speaking については 4.67→6.67 (2.00 点増)、Listening については 4.00→7.67 (3.67 増)、Reading については 4.33→6.00 (1.67 増)、writing については 4.00→6.67 (2.67 増) という結果であった。特に Listening に対しては自信を持てるようになったことのがえる数値の伸びが見られる。異文化適応能力については、自尊心・自己受容といった人格要素に関しては 3.67、あいまいさや不確実性に対する忍耐度といった感情規制要素は-2.00、クリティカルな考え方と創造性といったクリティカル思考要素は 10.00、開示と柔軟性といったオープンネス要素は 13.00、そして異文化適応能力の総合点は 24.67 であった。これら四要素の中で特筆すべきスコアを示しているのは、あいまいさや不確実性に対する忍耐度 (感情規制要素) である。マツモト (1999) によれば、この忍耐度の高さは異文化の中で自らの力で適応をはかっていける数値とされている。変化や意外なことに対しても適応する力があり、ユーモア、言語能力、交渉力もあるとされている。その他の 3 つの要素に関しては、普通のレベルにとどまっており、国際適応者となるためにはいま一步の努力が必要とされているレベルであった。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 項目以上 8 項目以内で記載)

① 職業体験型留学	② 異文化適応能力	③ 英語力	④ 英語に対する自信
⑤ TOEIC	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本研究は、2016 年度「海外英語演習 A」(ハワイ研修プログラム)に参加した学生を対象に調査を行ったものである。そのため、調査対象者となったのは 3 名だけであり、対象者数をかんがみると精度の面での不確かさの懸念がぬぐいきれない。そのため、本研究の成果は研究ノートで発表したいと考えている。また、TOEIC のスコアに基づいた英語力、アンケート結果からみられる英語に対する自信、異文化適応能力の変化をより明確にとらえるためにも、ハワイでの現地研修前 (前期の授業を受けている間) と実際に現地で研修を受けた後の双方で TOEIC とアンケートを実施し、比較分析を行いたいと考えている。すでに 2017 年度プログラムには、2016 年度を大きく上回る 10 名を超える学生からの応募があり、2016 年度の学生から得たデータも含め、精度において、より信頼のおける数値と回答 (自由記述) が示されるものと期待している。来年度に向け、本研究をさらに発展させて行きたいと考えている。